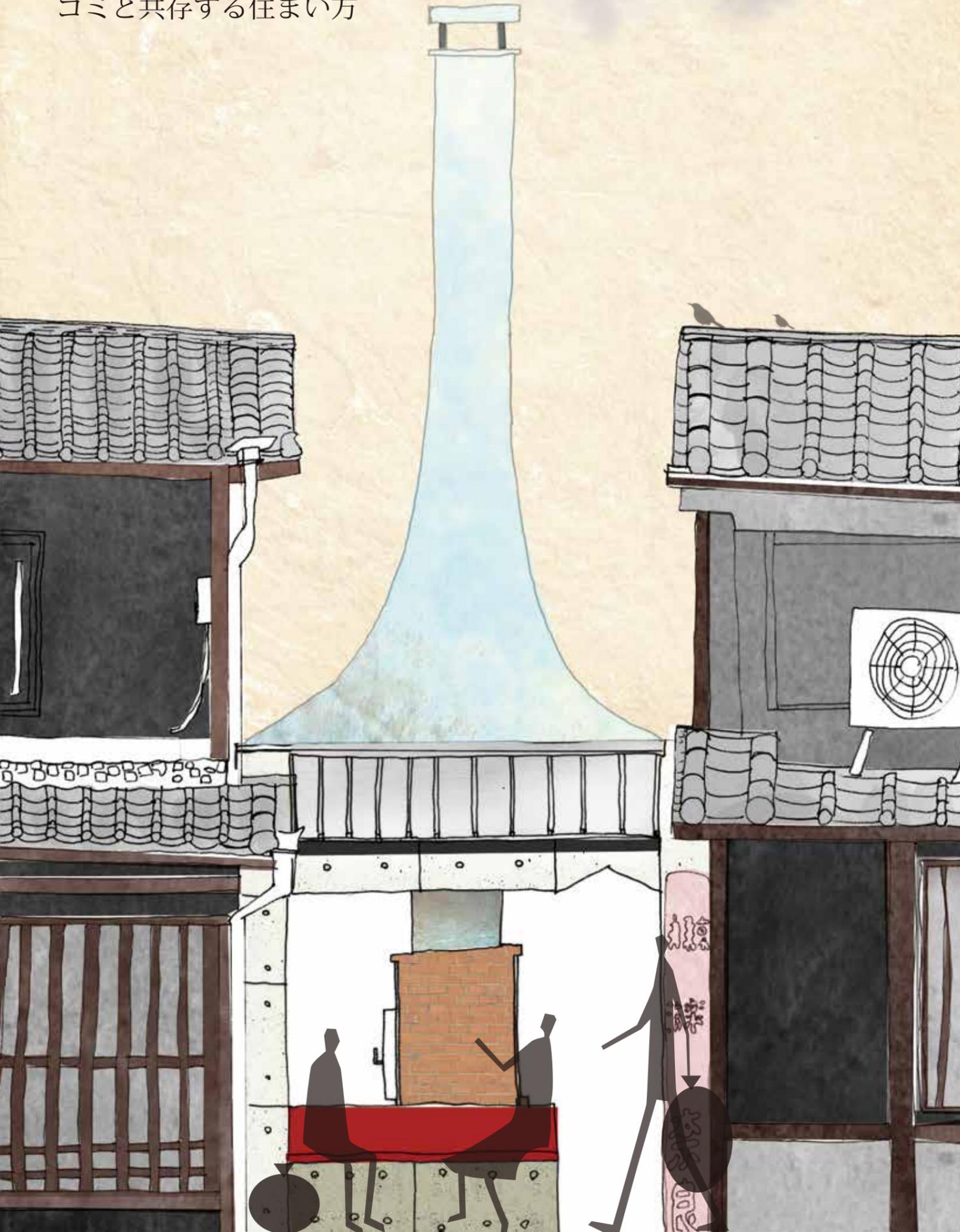


ゴミと共存する住まい方



■ ゴミと日常

??? 住まうこと、つまり日常においてゴミが出るのは今の時代において必然と言ってもよい。しかし、そのゴミが引き起こす問題は看過できないものとなっている。現に最終処分場の面積限界は見え始めている。そのような状況にも関わらず我々はゴミを増やし続け、問題に背を向け、気づいていないふりをしているように思える。

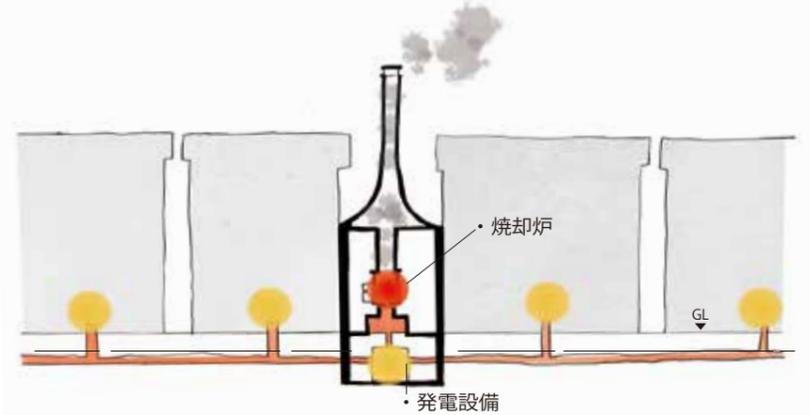
■ 敷地概要



敷地は奈良県に存在する、とある城下町。歴史的な街並みを所々に残している一方で、手入れの行き届かない空き家と何の機能も持たない空き地の増加が目にとまる。それらは魅力的景観を形成するポテンシャルを阻害する要因となっている。荒れた空き家とバリケードがされた空き地は治安上、景観上でも健全とは言い難い。適度な速度でそれらを更新し、古い中に新しい素材・色などを挿入した景観形成が他の歴史的町並みにおいても必要とされているのではないかと。

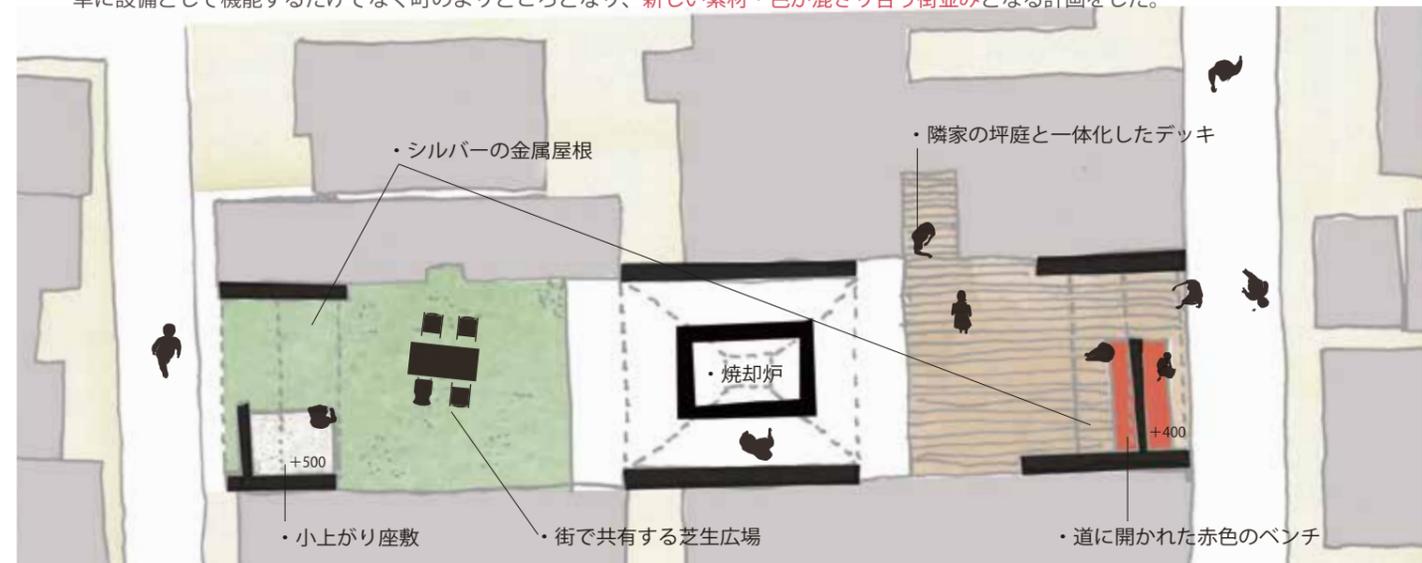
■ 街区型コージェネレーションシステム

街区単位の自立式エネルギー供給システムを提案する。街並みに挿入されたゴミ焼却施設にて、焼却された際に得られる廃熱を利用した発電によるコージェネレーションシステムである。(右図参照)
 日常で排出されるゴミをエネルギーに変換し、生活に還元する。ゴミと人の距離は縮まり、さらには地方における自立したエネルギー供給を可能とするものである。小さく開発することがこのシステムモデルの特徴である。



■ 平面計画

単に設備として機能するだけでなく町のよりどころとなり、**新しい素材・色が混ざり合う街並み**となる計画をした。



■ 地方の脆弱なエネルギー事情

日本の地方においてエネルギー関係のインフラは大きな単位で一括管理されている。日常は安定して供給できる利点があるが、災害時などの非常時は発源地のみならず周辺の地域までエネルギー供給が止まってしまうという極端な性格をもつ。地方単位で自立した供給システムを確立することが重要であると考えられる。右の図は震度の大小と一変して、広範囲な影響が出ていることを示す。

